

宮川絹代・澤直哉両氏に日本ロシア文学会賞

浦 雅 春

日本ロシア文学会学会賞選考委員会は2014年6月28日に最終選考会を開催し、今年度のすぐれた研究業績として以下の2作に学会賞を授与することに決定した。

【著書】宮川絹代：『ブーニンの「眼」 イメージの文学』（水声社, 2013年, 428頁）

【論文】澤直哉：「書物の解体——ウラジーミル・ナボコフ『マーシェンカ』をめぐる」（『ロシア語ロシア文学研究』第45号掲載）

以下の選評は学会賞選考各委員の意見をもとに委員長の浦がまとめたものである。

ブーニンについては、近年わが国においても作品集の刊行がはじまり、望月恒子氏や宮川絹代氏らによって意欲的な論文が書かれるようになったものの、いまだ本格的な研究書を持たなかった。その意味では『ブーニンの「眼」 イメージの文学』はわが国ロシア文学研究の空白を埋めるものとして、その意義は大きい。

選考委員会が何よりも高く評価したのは、宮川氏が独自の観点を打ち出し、ブーニン文学の本質に迫ろうとしている点にある。著者はここでブーニンの作品に潜められた思想を取り出すわけでもなく、ブーニンが本領とする恋愛小説からその恋愛観を取り出して議論するわけでもなく、その作品に書き込まれた「イメージ」を丹念に解説していくことに主眼を置いている。扱われる作品はほぼ亡命後の作品に絞られているとはいえ、文献の渉獵は広範囲におよび、先行研究へ

の目配りにも遺漏がない。本文と注を併せて 400 頁を超える本書は、質・量ともに充実した本格的なブーニン研究に仕上がっている。

第一部では、「眼で考える」と言われるブーニン作品の視覚が、光にあふれる外的世界を知覚する主人公の「昼の眼」と、夜のしじまで内面を凝視する「夜の眼」の対比のなかで分析され、それぞれが主人公の「私」に色濃く染められた主観的世界であることが明らかにされる。これが導入として機能し、本書の中核をなす第二部、第三部へと読者をいざなっていく。

いわば「すべてが見えてしまう」ブーニンの眼について第一部が語っているとすれば、第二部以降はその眼が「見えざるもの」と遭遇する事態の分析にあてられる。それは端的に言って恋愛によって引き起こされる事態を指すもので、ここに「恋愛」のテーマが導入される。チャーホフやナボコフ作品との比較からブーニンの恋愛小説の特質が詳細にたどられると同時に、「昼の眼」でも「夜の眼」でもなしえなかった「他者への架橋」というブーニン作品の新たな側面があぶり出される。だがここでも著者は、「他者」とは言わず、執拗に「イメージ」分析にこだわる。絶対的な視覚を誇った主体のまなごしを頓挫させる「不可視なるもの」は、ときに現在の時間をたやすく凌駕し、生死の世界をも淀みなく往還する「軽い息」として現前し（「軽い息」は作品の表題でもある）、あるいは視覚の専制を阻む「胎内的なるもの」という語に集約される。「他者」とは言わず、「女性性」という語に回収するのではなく、「不可知」「不可視」なものに「胎内的」といういささか耳慣れない語をあてることによって、本書は分析と構築の論理に偏りがちな作品研究により自由な連想と飛翔を可能にしている。

このイメージの自由な飛翔と往還から、第三部では「恋愛のテーマ」から「記憶のテーマ」をたぐり寄せられ、ブーニン文学の新たな局面である「他者との出会い」という問題が掘り下げられていく。ブーニンの短編「遅い時刻」で登場し、彼方から主人公を見守っている「緑色の星」の存在から、これまでブーニン作品には見られなかった「他者」との出会い、ひいてはブーニン作品の新たな胎動がほの見える。

宮川氏のこの本の本領がイメージへのこだわりにあることは見られる通りだが、ただし、本書の鍵概念である「胎内的」という語は十分咀嚼されているとは

いえず、さらに用意周到な議論が必要だとの印象は否めない。なお、本誌には望月恒子氏による詳しい書評が掲載されているので、それをご参照いただきたい。

澤直哉氏の論文「書物の解体——ウラジーミル・ナボコフ『マーシェンカ』をめぐって」は、小説『マーシェンカ』の作品分析という体裁を取りながら、その実、作品を読むとはどういうことかという原理的な問題に分け入った刺激的な論文である。

複数の写真の存在からマーシェンカの不在の徴を引き出し、ガーニンがエキストラ出演した映画からガーニンの自己同一性のゆらぎを導き出す冒頭から、この論文はすぐれて示唆的であると同時に強い喚起力を有している。『ロリータ』同様、『マーシェンカ』とその名を口のなかで転がせる快感の指摘をとっかかりに、身体を脱落させた電話の声からマーシェンカの肉体の消失を俎上にのせる議論も刺激的なら、マーシェンカの手紙を引きながら、そこにある文字〈я〉の乱れや、手紙のなかでの呼びかけの変化から、「あなた」と「私」の消失を読み込んでいくのはスリリングですらある。そうした布石があるだけに、最後にさらりとふれられる列車のなかでレインコートに顔を埋めるガーニンの姿から「顔」の消失を指摘し、その後一切「ガーニン」という表記が登場しないことをもってガーニンの消失と断じることにも納得がいく。

だが、この論文の射程に収められているのはそれだけではない。

先にもふれたように、この論文は「作品を読むとはどういうことか」という問いもはらんでいるのである。

「仮にいわゆる〈読むこと〉が、テキストの彼方に失われた『あなた＝作者』の〈声〉を『私＝読者』が欲望することであるならば、マーシェンカの手紙を巡る上述のような論理は、『マーシェンカ』という書物をも暗示しているといえるだろう」と著者が書いているように、これは従来の作者還元的な読みではなく、新たな作品解読の可能性を示唆するものでもあるのだ。

力量を感じさせる論文であるだけに、著者による本格的なナボコフ論が期待される。